

支部情報

広島支部の近況



村上慶子 (広島支部)

コロナ禍がやや下火になったにも関わらず、予想外の酷暑に大変な思いをされた方も多いと思います。また、急に寒くなり中高年には厳しい季節になりました。私たちの支部もご多分に漏れず、高齢化による会員の減少がありますが、それなりに頑張っています。全国大会は終わりましたが、ホッと

支部だより



藤原梨江 (和歌山支部)

みかん色の着物が明るく元気が一番和歌山支部です。まずは、令和5年度全国大会で入賞した青少年たちのひと言感想を紹介させていただきます。

●長谷 咲希 (小5)

唄は残念でしたが、三味線で準優勝がとれて良かったです。それに、銭太鼓もなるべく落とさないように気を付けて、自分なりにがんばれたと思います。台風の中、大会に出た甲斐がありました。

●長谷 和明 (中1)

前回の大会から4年ぶりになりましたが、今年も台風に見舞われての参加になりました。久しぶりの全国大会だったので、すごく緊張しました。唄は、声変わりもあつたので残念な結果となつてしまいましたが、絃や鼓、特に絃では最高の演奏ができ、自分でも練習

する間もなく11月末に行われる山陽四国地区大会が迫っており、出場者は練習に余念がありません。

先日、支部総会が行われ、会員から「支部間の交流をもっとはかり、イベントなどもどしどし参加したらどうか」と言う意見が出ました。色々なイベント



トで安来節をもっともつとアピールしていけたらと思います。総会の最後に、会員一同の集合写真を撮って終了しました。

の成果がでたと思っています。結果、優勝できたので、本当に良かったです。指導してくれた祖母や先生方には、とても感謝しています。この優勝は自分だけでなく、支えてくださった様々な方達とつたものと思っています。

今回の大会では、多くの経験を積みました。次回の大会では、結果はどうであれ、満足できる演奏ができるよう練習していきたいと思っています。

●辻 真宙 (中3)

私にとつて2回目の全国大会でした。前より出場する種目も増えて、賞状や優勝旗もいただけてうれしかったです。少し緊張しましたが、思うようにできなかったところもあつたけど、終わったとき大勢の人が拍手してくれたので、来てよかったなと思えました。

来年は、もう少年の部ではないので、また行けるように頑張ります。

また、銭太鼓の部には、中野杏音(中1)と宮本拓音(中3)も参加してくれ、プラス若いお姉さん二人とも頑張ってくれました。会場ではたくさんの方に声援と拍手をいただき、控室に戻ってから、子供たちの頑張りにエールを送っていたいただき、ありがとうございました。今後の活躍に期待したいです。



会員の声「コーナー」

安来節との出会い



浦川香代子 (大江戸支部)

私の安来節との出会いは、夫の妹がスペインの方との結婚を機に始まりました。彼らが日本で結婚式をあげると聞き、私の心は一つの思いに駆られました。「せっかく日本まで来てくれるのだから、何か特別なおもてなしをしたい」と、しかし私は英語もスペイン語も話せません。そこで、言葉を超えて心を通わせることができる日本語らしい出し物を探し始めました。そして、私が出合ったのは「どじょうすくい踊り」でした。この踊りは、言葉が不要でストーリーがあり、笑いが生まれる。そして何より日本らしさが溢れている。私は

草鞋を作る人に 思いを



清野勝利 (東北支部長)

出演を依頼された仙台市の敬老祝賀会での事。唄、踊り、銭太鼓の演奏を終えての帰り際、会の実行委員の方から「昨年までは宴の途中で帰宅する人が多かったが、今日は席を後にする人が見られず、皆さん楽しんでいました。ありがとうございます」と、お礼の言葉を頂いた。確かに会場の雰囲気は和気あいあいと笑いが溢れて、私達の演技を楽しんだ様子で、終了時には私達への大きな拍手が響いた。

すぐにこの踊りの魅力に引き込まれ、「東久留米どじょうすくい教室」一宇川清子先生のところへ入門を決意しました。初めて教室で見た踊りに、思わず涙がこぼれまわった。その美しき、力強き、情熱その伝統の重みに心を打たれたのです。その瞬間から私の人生は安来節とともに新たな道を歩み始めました。結婚式の踊りは大成功！拙い踊りにも関わらず、スペインのご両親はスタンディングオベーションで称賛してくれました。その喜びの瞬間、私はさらに安来節の奥深さを追求したいという情熱が湧き上がりました。私が通っている教室では、介護施設のイベントや、地域の文化祭での披露の機会があります。特に文化祭では、二十名以上教室の生徒が集まります。その熱気と楽しさは言葉にできません。同じ先生に教わっているのに、一人として同じ踊りはなく、個性が出ていてとても勉強になります。

毎回の披露で観客からの笑顔や拍手を受けるたび、私は「やってよかった」と心から感じます。そして、次回はもっと上手に踊ってさらに多くの人々に喜んでもらいたいという思いが強まります。全国優勝大会にも挑戦しています。先生の教えを胸に、仲間たちと切磋琢磨することで、令和5年、唄2級 奨励賞、踊り三段 優勝することができました。この賞は先生のご指導と支えがあつたからこそです。先生の日々の温かいご指導により私は成長し、多くの事を学ぶことができました。ここは通過点でしかなく、まだまだ未熟、これからも日々練習に励んで参ります。安来節との出会いは、私の人生を豊かにし、新たな価値観をもたらしてくれました。安来節をもっと多くの人に知ってもらい、この伝統文化を大切に、将来は次世代に伝えていきたいと思えます。

た。宴の最後に、挨拶を指名された私は、私達への拍手より、もっと大きな拍手と感謝をすべき方々があります。その方々とは、今日のこの祝賀会実施にあたり、ご出席された皆様方に喜んで頂ける祝賀会を企画し実行に努力された役員の方々です。

「駕籠に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」の諺がありますが、駕籠に乗って楽しんだ方々は、祝福をお受けになった皆様方で、その駕籠を担がせて頂いたのは、安来節保存会東北支部の私達です。しかし、陰ながら今日の祝賀行事を企画し、実行にこぎ着け苦勞した役員の方々には、正に草鞋を作った人です。ここにおられる役員の方々、感謝を込めて大きな拍手を。会場は大きな拍手が鳴り響いた。その帰り、ふと安来節保存会の組織と役割が頭に浮かんだ。平日頃から安来節保存会の発展隆盛の為、明日の、いや数年先の懸案事項にご苦勞なさっている役員と事務局の方々には、草鞋を作り駕籠担ぐ人、各会員は駕籠に乗って、いるのかなど。だとすると、草鞋を作り駕籠を担いでくれている役員と事務局の方々に、改めて感謝とご協力が、なお一層必要だと思われた。



会場からの帰路は、空限りなく澄み渡り涼秋爽やかで、忘れがちな感謝を再認識。脚下照顧、私にとつて誠に有意義な日でありました。